石巻健育会病院

太田耕造（副院長）

功　　績　急性期を脱して間もない患者さんに対して、療養病棟で安全に医療を提供できる体制を整えるとともに、多職種連携によって全身状態の安定が図られた。残念ながらご逝去に至ったもの、ご家族から重ね重ね感謝の言葉を頂くことができた功績。

推　薦　者　菊池美咲

推 薦 理 由　多職種で連携して対応したことで、患者さんが僅かでも回復の兆しを見せ、安定した時期を過ごすことができたのではないかと考えます。またご家族の理解や受け止めに応じた対応が、ご家族の安心感にもつながったと考えます。今回ご家族から感謝のお言葉を頂けたのは、医師である太田副院長がリーダーシップをとってチームを導いた功績であると考えます。日頃から看護師はじめ多職種からの情報に対して丁寧に対応して下さっている太田副院長に、感謝の意を込めて理事長賞に推薦いたします。

内　容

患者さんは約2か月間の急性期治療を経て、2020年8月に低酸素性脳症、遷延性意識障害で医療療養病棟に入院されました。日常生活自立度C2、気管切開管理と経鼻経管栄養管理を要する状態で、仙骨部にはNPUAPⅢ度の褥瘡がありました。

また糖尿病の既往があったため、毎食前のインスリン注射が実施されていました。意識レベルは、声掛けにも開眼しない、または開眼していても声掛けに対する反応や追視はありませんでした。

妻は厳しい状態を受け入れつつも、患者さんのわずかな反応に回復の期待を寄せており、当院でできる限りのことをしてほしいと希望しました。この患者さんは、これまで当院では全く取り扱ったことがない気管切開チューブを使用していました。そこで太田副院長は、気切交換の方法を看護師も直接確認できるようにと、前医の医師と看護師を当院にお招きするよう指示しました。

前医からの直接指導によって、安全に気切交換や管理を行うことができました。

リハビリ、褥瘡管理、栄養管理など多職種介入によって、入院から2ヵ月後に褥瘡は治癒しました。意識レベルは声掛けに開眼したり追視が見られる程度まで改善しました。血糖コントロールはインスリン注射から内服薬での調整に変更となりました。

しかし2023年3月、肺膿瘍などで全身状態が徐々に悪化し、急変が予測される状況となりました。面会制限下であったため、妻の来院時には状態を細やかにお伝えしたり、妻の理解状況に応じた病状説明なども実施しました。また太田副院長の判断でオンライン面会を実施し、看護師は妻の歌声を患者さんに聞かせられるように対応しました。妻は「愛」や「ラブ」などの言葉が含まれる歌謡曲などを10分程度歌い、若かりし頃の思い出話を語りました。

オンライン面会後、患者さんが僅かに開眼したことを聞いた妻は大変喜んでいました。その後程なく患者さんはご逝去されました。

退院して数日後、妻から病棟にお電話がありました。葬儀などが無事終了したとのご報告と太田副院長はじめ医療スタッフに対する感謝の言葉がありました。さらに後日、折り紙の鶴を添えたお手紙を頂き、さらに感謝の言葉が綴られていました。